

聖書：コリント人への手紙第一 4：1～5

説教題：私をさばく方は主

日時：2022年3月13日（朝拝）

コリント人への手紙第一の最初の4章は、コリント教会で生じていた分派の問題を扱っています。すでに1～3章を見て来ましたので、今日から見る4章はその最後の章となります。1章12節に記されていた通り、コリント人たちは「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」などと言い、どのリーダーを支持するかを巡って互いに妬み、争っていました。その際、彼らが基準としていたのはこの世の価値観でした。どれだけ知恵をもって、雄弁に、この世の知者に劣ることなく立派に語り、振る舞うことができるかという観点から。しかしパウロはこれまでこの世の知恵は神の知恵といかに相容れないか、それは神の前に愚かであるかについて語って来ました。この世の知恵はやがて過ぎ去るもので、神の前に永遠に残るものではありません。だから知恵のある者となるために愚かになれ！と前回の3章18節で言われました。また教会の教師やリーダーをどう見るべきか、正しい視点について3章21～23節で語りました。特に22節ではパウロもアポロもケファもみなあなたがたのものであると言いました。コリント人たちは、それらの教師たちの違いに注目して、誰が一番優れているかと格付けし、自分が支持しない人を攻撃していましたが、それは神の御心に全くかなわないこと。「パウロが植えて、アポロが水を注いだ」と言われていましたように、神は多種多様な器を送って御自身の畑である教会を養い育てています。ですから神が送って下さった器すべてを活用して、そこから益を受けるようにすることが大切であると言われました。そしてこの4章に入ります。

パウロはここで教師たちをどう考えるべきかを改めて述べます。1節：「人は私たちがキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。」ここに二つの表現があります。一つ目は「キリストのしもべ」です。コリント人たちは自分が好むある特定の教師を高く上げて、その教師に自分たちがつくことによって、自分自身をも高く上げようとしていました。しかしそのように考えるべきでないと言われています。教師たちはキリストのしもべです。この「しもべ」という言葉は、良く使われる「しもべ」という言葉とは違って、大船の底の方で櫓をこぐ奴隷を指す言葉です。そのしもべは船長の指令のままに櫓をこぎます。船長はキリストです。ですからただキリストの命令のままに従い、その方に奉仕するしもべであるということです。

もう一つの言葉は「神の奥義の管理者」。あのルカの福音書 16 章の不正な管理人のたとえに出て来る管理人と同じように、この管理者もしもべです。しかし家の中の管理を任されたいわば家令です。ここでは「神の奥義の管理者」と言われています。「奥義」という言葉は 2 章 7 節に出て来ました。そこで見ましたように、聖書における奥義とは、長い間隠されて来たが今やイエス・キリストにおいて明らかに現わされた神の救いのご計画を指します。パウロたちはキリストにおいて今や明らかにされた神の福音を委ねられた者たちです。それを委託され、それを正しく宣べ伝える責務を負っています。

この管理人に要求されることは忠実と認められることだと 3 節にあります。大切なことは自分たちにこれを委託した主のお心に沿って忠実であることです。コリント人たちは自分たちの勝手な基準に従ってパウロたちを批判し、さばいていました。あの話しぶりはなっていないとか、この世の雄弁家と比べて見劣りする、とか……。しかしパウロは言います。私たちはキリストのしもべ、神の奥義の管理者である。あなたがたコリント人たちのしもべではない。コリント人たちに報告義務のある者ではない。私たちはキリストのしもべであり、神の奥義の管理者として、委託されたもの、神の福音に忠実であることが私たちに求められていることである。あなたがたの基準に従って、この世的な成功を治めるとか、人々にどれだけインパクトを与える話し方ができるかといったことが求められているのではない、と。

従ってパウロたちが重きを置かない二つの判断が次に示されます。一つ目は、3 節にある通り、あなたがたの判断すなわち人間のさばきです。それは「私にとって……非常に小さなことです」と彼は言います。なぜそうなのでしょう。まずこれまで見て来た通り、この世の知恵に基づく人間の判断は誤りやすいものだからということがあると思います。3 章 18 節で見た通り、この世の知恵は神の御前では愚かです。そのような神の知恵と一致しないこの世の知恵によって自分たちを誇る人たちの声にいちいち動かされる必要はない。しかしパウロがこのように言う一番の理由は、パウロたちは彼ら人間に対して責任を負っているのではないからです。パウロが一番気にすべきなのは主の評価です。主に忠実であることです。ですから人が私にどう言おうと、それはさして私に重要な意味を持たない！とパウロは言っているわけです。これはもちろん人の意見や批判を無視するとか、少しも耳を傾けないということではありません。

ん。正しい意味での意見や批判は有用です。しかしもし人の声、人の評価に重きを置き過ぎるとどうなるでしょうか。そうすると人に良く評価されることに自分の活動の焦点を合わせることにつながってしまいます。人が自分をどう考えるかに多くの関心を払って生活するようになります。そうするといつしかキリストに忠実であることがぶれてしまい、キリストが二の次になってしまいかねません。そこでパウロはキリストのしもべとしてキリストにこそ思いを向けるがゆえに、人のさばきや評価は小さなこと、いや私にとって非常に小さなことだと言うのです。

彼が退ける二つ目の判断は自分自身の判断です。3節後半に「それどころか、私は自分で自分をさばくことさえしません。」とあります。先に人間のさばきは私にとって非常に小さいとパウロは言いましたが、その人間の中に自分自身も含めています。彼は4節で「私には、やましいことは少しもありませんが」と言います。これを読んで私たちは驚くかもしれません。自分にやましさを少しも覚えなない人などこの世にいるのだろうか。もちろん彼は自分に罪はないと言っているわけではありません。ローマ人への手紙3章23節でパウロは「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず」と記していますが、この「すべての人」の中に彼は自分自身も含めているでしょう。またテモテへの手紙第一1章15節で彼は「私はその罪人のかしらです」とまで言っています。ですからパウロはもちろん自分を罪人の一人として数えています。ただここではそのような自分の人格についてではなく、使徒としての働きのことを言っているのだと考えられます。その働きについてはやましいと思うことは少しもないと。それでもこのように言えるというのはすごいことだと思います。彼はそのように生きた人だったのだということを改めて強烈に教えられます。そしてパウロは続けます。「だからといって、それで義と認められているわけではありません」と。人間の良心は無謬ではありません。私たちは自分に都合の良いことはしっかり覚えているものの、都合の悪いことは忘れ、あるいは過小評価するということがあります。また私たちが意識していないこと、自覚していないこともあります。パウロはもちろんこう述べることによって自己吟味を放棄しているわけではありません。後に11章28節で、聖餐式に関する言葉の中で、それぞれが「自分自身を吟味して、その上でパンを食べ、杯を飲みなさい」と語りますように、それは大切な位置を持っています。ただ彼がここで言っていることは自分が自分のさばき主になることはしないということです。4節最後に「私をさばく方は主です」とあります。それをなさるのは主である。それをするのはコリント人ではないし、また私自身でもないと言っているわけで

す。

そうして5節に、主こそさばき主であることが語られます。5節前半：「ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。」正しいさばきは主が来られる日・主の再臨の日に主によってなされます。その日に先立って、あなたがたが先走ったさばきをしてはならないとパウロは言います。なぜそうなのかは次の文章を読むとよりはっきり分かります。「主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます。」ここから改めて分かることは、やがての主の再臨の日になって初めて明らかにされる多くのことがあるということです。それまでそれらのことは闇に隠れたことのようによく見えないし、人々に知られていない。まさにその日まで人々には隠された状態にあります。それらの多くのことが、主の再臨の日に初めて明らかにされます。その日までの間、私たちが知っているのは外側に見えたことだけです。ごくごく一部分です。だとしたらどうして私たちはその日が来る前に他人をさばけるかということになります。自分には見えていないことがたくさんあるのです。これから明らかにされることが沢山あるのです。なのに自分はすべてを知っている者であるかのように自負して、ある教師たちのことを、あなたはこうだと決めつけ、評価し、また断罪しても、やがての日に主から、あなたの判断は全然違う、見当違いも甚だしい！と言われることにならないでしょうか。何も分かっていないくせにあなたはなぜそんなことを勝手にしたのか、あなたにその資格はない！と断罪されるのみです。そしてそれは何よりも主の大権を奪おうとすることです。頼んでもいないのに、最後の日を前にして主の裁判官としての席に勝手に座り、自分が主であるかのように振る舞うことです。そのような先走ったさばきはしてはならないと言われています。

このように主の再臨の日は、闇に隠れたことも明るみに出され、心の中のはかりごと明らかにされる日です。人に知られていなかった行動も、また人には知り得ない心の動きも、その心を占めていた思いも、また何を願い何を求めてその人はどのように生きたのか、ということのすべてが明らかにされます。その結果、表に現れたことに基づいて私たちが地上でなした判断と、主がその日に明らかにされる判断とは大きく異なるものとなるでしょう。そして私たちの間で称賛され、高く持ち上げられていた人が、かの日には全然そういう人ではなかったことが明らかにされ、逆に私たちの間で評価されず、むしろ蔑まれていた人が実は主の前で最も素晴らしい人の一人であ

ることが明らかにされるのでしょうか。私たちはこのようなかの日についてどう思うのでしょうか。すべてを明らかにする主の再臨の日は恐ろしい日、怖い日でしょうか。

しかし注目すべきは5節の最後の言葉が肯定的に語られていることです。すべてがその日に明らかにされることによって私たちは断罪されると言われているわけではありません。パウロはこのように結んでいます。「そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。」ここから分かることは、ここで特に考えられているのは、やがての日に称賛に至るであろう、それまで隠されて来たことについてであるということです。人に知られて来なかった多くの称賛に値することが、その日に初めて明らかにされる。そしてその人は神から称賛を受ける。もちろんその日には都合の悪いことも明らかにされてさばきに至るという側面もあるでしょうけれども、パウロがここで考えていたのは、今は隠されているが、やがての日には賞賛に至る事柄であるということです。

ここから最後に二つのことを述べて今日のまとめとしたいと思います。一つ目として今日の御言葉から改めて教えられることは、主が来られるまで先走ったさばきは禁物であるということです。物事には今明らかにされていることと、主の日に初めて明らかにされることの二つがあります。そして私たちは前者のことしか知りません。そんな私たちは果たして誰かをさばけるのかということです。一部しか知らないのに、その人について知らないことが沢山あるのに、すべてを知っている者であるかのような顔をして、誰かを非難したり、攻撃できるのか。あるいは逆に一部分しか知らないのに特定の人を熱狂的に持ち上げることは正しいのか。やがて初めて明らかにされる多くのことがあることを思えば、私たちの今ここでのさばきはほとんどナンセンスと言わざるを得ないと思います。たぶんそれは外れていると思います。かの日にそのことで恥を見るだけだと思います。ですから、主が来られるまで何についても先走ってさばいてはなりません。さばく方は主です。私たちがその主の椅子を勝手に横取りすることがないように。さばきはそれにふさわしい主が将来なすことを見据えて、慎み深くあるべきことを今日の御言葉は私たちに求めています。

そしてもう一点は、今日の御言葉は私たちに慰めと励ましを与えるものであるということです。私たちはみな主に感謝し、主のためにと歩んでいる者たちです。しかしそういう私たちの歩みは周りの人々に評価されないということがしばしば起こりま

す。むしろ思ってもみない形で誤解され、そのことによって批判され、まさにさばかれる。皆さんもそれぞれ、そのようにされた経験があるのではないのでしょうか。しかし主は、人々が知らない私の本当の思いとか、その心にあったことをかの日に明らかにしてくださいませ。そしてそこにある良いものについて称賛を与えてくださいませ。もちろん先に見たように、すべてを明らかにするという主の再臨の日についての真理は、私たちにとって警告でもあり得ます。主は細かくは見えていないだろう、私の心の奥底までは知らないだろうと考えて、人間関係ばかりを気にしてうまくこの世を渡って生きた人にとって、これは恐ろしい御言葉です。自分のすべてがひっくり返されるであろう真理です。しかしこれは主に忠実に生きようとする私たちの心を励ます真理でもあります。私たちは主に忠実に歩むことに心を向けてさえいれば、ある意味で人に評価されなくてもいいのです。人に認められなくてもいいのです。人には私のすべては見えていません。ですから誤解されることもあり得ます。しかし主は全部を見て知っておられます。私の思いのすべてです。果たしてやがての日に称賛に値する良いものなど自分の内にあるのだろうかとか心許なく思う私たちですが、主の救いに感謝し、主に忠実に歩もうとするなら、主はそこに確かに存在する良きものを漏らさずに見ていてくださいませ。そしてそれをかの日に明らかにし、またそれに報いてくださいませ。ですから私たちは人の評価ではなく、すべてを知ってくださる主の前で、主に忠実に歩むことに心を定めて歩めば良いのです。願わくはかの日に、「人は誰も知らなかったが、わたしはそれを見て知っていたよ」と主に言われ、そのことが明らかにされ、神からの称賛の言葉をいただく者たちでありますように。その日を目指して、主に忠実に歩むことを何よりの自分の願いまた喜びとする私たちの歩みへと、このみことばによってこの週も励まされ、導かれて行きたいと思います。